

長田夏樹著作目録

長田礼子 長田俊樹

凡例

- ・ 本稿は、長田夏樹氏が 70 歳の時に作成された「教育研究業績書」をもとに増補したものである。
- ・ 「*」を付した部分は、長田氏本人の執筆にかかる概要である。

<著書>

1. 『蘇州語發音字典』(単著), 神戸市外国語大学呉語研究班, 1953 年 9 月; 波多野太郎編『中国語文資料彙刊』第 5 篇第 3 卷, 不二出版, 1995 年 11 月。
* 神戸氏外国語大学教授坂本一郎を代表とする昭和 24、25 年度の文部省科学研究費による総合研究「呉語文学の語学的研究ならびに呉語辞典の編纂」の成果の一部として刊行。
2. 『現代中国語文法』(共著), 江南書院, 1956 年 4 月。
* 共著者: 鳥居久靖、香坂順一、望月八十吉。本人担当部分は共同討議のため、抽出不可能。
3. *The Zirni Manuscript — A Persian-Mongolian Glossary and Grammar* (共著), 京都大学, 1961 年。
* 京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊の刊行成果の第 6 冊として出版。ペルシア語で書かれたアフガニスタンのモゴール族の語彙と文法を記したマニユスクリプトの解説と研究。共著者: 岩村忍、山崎忠。本人担当部分: Introduction (1-29 頁) 本人が執筆し、岩村が補正、Transcription and Translation (30-80 頁) 山崎が執筆し、本人が補正、Glossary, Index (83-160 頁) 本人が執筆し、岩村が監修。
4. 『原始日本語研究—日本語系統論への試み』(単著), 神戸学術出版, 1972 年 12 月。
* 論文「上代日本語とアルタイ語族」「原始日本語研究導論—アルタイ比較言語学の前提として」と「東雅臆度抄(其一)」「東雅臆度抄(其二)」「東雅臆度抄(其三)」に加筆して、神外大助教授蔵中進氏の補注を加えて出版。
5. 『謎の四世紀』(共著), 毎日新聞社, 1974 年 4 月。
* 共著者: 北村文治、水野祐、鈴木武樹、井上秀雄、直木孝次郎。本人担当部分: 「倭人の言語とその展開」(111-136 頁)。なお、同書収録のシンポジウム「謎の四世紀とその前後」(195-271 頁)にも出席参加。
6. 『日本古代語と朝鮮語』(共著), 毎日新聞社, 1975 年 8 月。
* 共著者: 大野晋、金思燁、馬淵和夫、藤堂明保。本人担当部分: 「日朝比較言語学とト

ウンゲース諸語」(81-100頁)。なお、同書収録のシンポジウム「日本古代語と朝鮮語」(125-188頁)にも出席参加。

7. 『日本の生活の母胎(先史～古墳中期)』(共著), 河出書房新社, 1975年10月。
* 『日本生活文化史』の第一巻として出版。共著者: 坪井清足、石毛直道、金関恕、佐原真、田辺昭三、町田章、横山浩一他。本人担当部分: 第八章「日本語の形成」(155-172頁)。
8. 『広韻成立研究小史—漢字文化圏における中国語の受容と展開』(共著), 神戸市外国語大学『外国学研究』IV, 1977年3月。
* 神外大研究班の班員が執筆する同研究所発行の『外国語研究』IVの一編(1-72頁)。共著者: 蔵中進、原田松三郎、日下恒夫、高橋庸一郎、濱政博司。
9. 『日本神話の比較研究』(共著), 有精堂, 1977年4月。
* 『講座日本の神話』第11巻。共著者: 松本信広、伊藤清司、小野明子、佐口透、吉田敦彦。本人担当部分: 「日本語の比較言語学的研究」(98-126頁)。
10. 『聖徳太子伝暦訓解』(共著), 神戸市外国語大学『外国学研究』VIII, 1978年3月。
* 共著者: 蔵中進、原田松三郎、高橋庸一郎。本人担当部分は共同討議のため抽出不可能。
11. 『邪馬台国の言語』(単著), 学生社, 1979年3月。
* 前記著書『謎の四世紀』『日本の生活の母胎』の本人執筆の部分と論文「魏志倭人伝訳音の音価に就いて」「大宝二年籍帳の仮名体系について上・下」「邪馬台国の言語」「万葉・宣命・訓点語」「邪馬台国をめぐる言語10の知識」「日向に関連あるか女王卑弥呼」を編集して出版。
12. 『内陸アジア言語の研究I』(共著), 神戸市外国語大学, 1984年3月。
* 共著者: 庄垣内正弘。本人担当部分: 「契丹語解説方法論序説」(1-49頁)。
13. 『東大寺図書館蔵文明十六年書写「聖徳太子伝暦」影印と研究』(共著), 桜楓社, 1985年12月。
* 共著者: 蔵中進、原田松三郎、高橋庸一郎、山川英彦。本人担当部分: 序(5-11頁)、年表(409-429頁)の補正と全体の調整。
14. 『「杜家立成雑書要略」注釈と研究』(共著), 翰林書房, 1994年2月。
15. 『正倉院本王勃詩序の研究I』(共著), 神戸市外国語大学, 1995年3月。
16. 『長田夏樹論述集(上)近代漢語の成立と胡漢複合文化—靺鞨韃靼・遊仙窟・唐詩・扶桑権域・宋詞・西夏の言語とその基層文化—』(単著), ナカニシヤ出版, 2000年6月。
17. 『長田夏樹論述集(下)漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』(単著), ナカニシヤ出版, 2001年1月。
18. 『新稿 邪馬台国の言語』(単著), 学生社, 2010年9月。
【補】『長田夏樹先生追悼集』(好文出版, 2011年1月)には上記単行本に未収録の論文・随筆等が多数収められている。以下『追悼集』と略記。

<学術論文>

1. 「上代日本語覚書」(単著), 東京外語大文芸部機関誌『炬火』第33号, 16-25頁, 1941年12月; 『蒙古』第10巻第2号, 61-69頁, 1943年2月; 『原始日本語研究』1-8頁; 『論述集(下)』3-11頁。
2. 「上代日本語とアルタイ語族」(単著), 東京外語大文芸部機関誌『炬火』第34号, 4-19頁, 1942年9月; 『蒙古』第10巻第2号, 69-81頁, 1943年2月; 『原始日本語研究』8-26頁; 『論述集(下)』11-29頁。
3. 「上代日本語とアルタイ語族」(単著), 善隣協会『蒙古』第10巻第2号, 61-81頁, 1943年2月。
* 上記「上代日本語覚書」と「上代日本語とアルタイ語族」を併せて転載。
4. 「上古中国語における語頭重子音について」(単著), 『中国語学』第17号, 1-4頁, 1948年7月; 『論述集(下)』30-35頁。
* 中国語学研究会(京大、1948.6)で発表した研究の梗概。
5. 「中国語史的比較言語学方法論序説」(単著), 神戸外専『外事論叢』第2巻第2・3号, 15-26頁, 1948年7月; 『論述集(下)』36-51頁。
* 諧声文字の示す上古漢音を、カールグレン説に基づいて復元し、その音価を対応するシナ・チベット語族帰属のシナ・タイ語派の語彙と比較したもの。
6. 「中国語と比較言語学」(単著), 『中国語雑誌』第4巻第1号, 34-38頁, 1949年1月; 『追悼集』1-5頁。
* シナ・チベット語族の概要とその成立の可能性について論じた。
7. 「元仁宗皇帝聖旨碑の白話に就いて」(単著), 『神戸外大論叢』第1巻第1号, 21-30頁, 1949年6月; 『論述集(上)』4-14頁。
* モンゴル語と元代白話の対訳である聖旨碑によって中国語虚字の用法を考えようと試みた。
8. 「満州語と女真語」(単著), 『神戸言語学会会報』第1号, 1-5頁, 1949年7月; 『論述集(下)』59-68頁。
* 神戸言語学会(神外大、1949.5)で発表の梗概。
9. 「原始日本語研究導論—アルタイ比較言語学の前提として」(単著), 『神戸外大開学記念論文集』45-80頁, 1949年9月; 『原始日本語研究』27-62頁; 『論述集(下)』69-111頁。
* 主として上代日本語と朝鮮・満州蒙古語の音韻、語法の対立について論じているが、上代日本語を表記する漢字音の音価については、中国、朝鮮、越南の漢字音を参照している。
10. 「タイ諸語音韻体系に対する一考察—中国語史的比較言語学の一環として」(単著), 『神戸外大論叢』第1巻第2・3号, 16-31頁, 1949年12月; 『論述集(下)』112-127頁。
* 上古中国語の音韻体系とタイ諸語の比較によって比定される共通タイ語の音韻体系を

対応させようと試みた。

11. 「上古中国語音韻体系瑣説」(単著), 『中国語学研究会関西月報』1-4 頁, 1950 年 3 月 ; 『論述集 (下)』52-58 頁。
* 中国語学研究会 (京大人文研、1950.2) において発表した研究の概要。
12. 「北京語のローマ字表記に就いて」(単著) 『神戸外大論叢』第 2 卷第 1 号, 39-52 頁, 1951 年 4 月 ; 『追悼集』6-19 頁。
* 中国語学研究会第 2 回全国大会 (京大人文研、1950.11.13) において発表した研究に補筆したもの。
13. 「女真語資料の史的言語学的研究—アルタイ諸語比較言語学の一環として」(単著), 『文部省科学研究報告集録』, 1951 年 11 月。
14. 「契丹文字解読の可能性—村山七郎氏の論文を読みて」(単著), 『神戸外大論叢』第 2 卷第 4 号, 40-66 頁, 1951 年 12 月 ; 『論述集 (下)』128-153 頁。
* ウラルアルタイ学会 (大阪外大、1951.7.9) で発表の研究に補筆、村山七郎氏が『言語研究』17・18 号 (1951.3) に発表した「契丹文字解読の方法」を批判し、その対案を示そうとしたもの。
15. 「中国語史資料瑣記」(単著), 『華僑文化』第 2 卷第 4 号, 14 頁, 1952 年 5 月 ; 『追悼集』486-485 頁。
16. 「Mongolo-Turcica—アルタイ比較言語学序説」(単著), 『Azia Gengo Kenkyu』第 1 号, 59-80 頁, 1952 年 12 月 ; 『追悼集』23-44 頁。
17. 「十二世紀に於ける蒙古諸部族の言語—Mongolo-Turcica II」(単著), 『東方学』第 5 号, 42-55 頁, 1952 年 12 月 ; 『論述集 (下)』154-171 頁。
18. 「呉語研究書目解説」(共著), 『神戸外大論叢』第 3 卷第 4 号, 56-103 頁, 1953 年 2 月。
* 中国語学研究会 (神戸外大、1951.9.23) で展示解説した呉語研究資料の書目。共著者 : 坂本一郎、小川環樹、倉田淳之助、太田辰夫。本人担当部分 : 地誌類の「風俗附方言」語彙の項を主として解説。
19. 「北京文語音の起源に就いて」(単著), 『中国語学研究会会報』第 11 号, 1-5 頁, 1953 年 2 月 ; 『追悼集』45-49 頁。
* 中国語学研究会関西例会 (大阪外大、1953.1) で発表した研究の概要。
20. 「接尾語として用いられた契丹文字の類別表」(共著), 『慶陵 I (本文冊)』256-270 頁, 京都大学, 1953 年 3 月。
* 共著者 : 小林行雄、山崎忠。
21. 「蘇州語音韻体系の諸特徴について」(単著), 『中国語学研究会論集』第 1 号, 35-49 頁, 1953 年 9 月 ; 『論述集 (下)』172-187 頁。
* 中国語学研究会第 3 回全国大会 (天理大、1952.11) において発表したものに補筆。
22. 「元代の中・蒙対訳語彙『至元訳語』」(単著), 『神戸外大論叢』第 4 卷第 2・3 号, 91-118 頁, 1953 年 10 月 ; 『論述集 (上)』15-64 頁。

- * 中世蒙古語を漢字によって表記した資料『至元訳語』の言語を蒙古文語と対応させたものであるが、その前提として、そこに用いられた訳音の音価比定を行っている。
23. 「遊仙窟雑験」(単著), 『中国語学研究会会報』第 24 号, 1-5 頁, 1954 年 3 月; 『追悼集』 50-54 頁。
- * 中国語学研究会関西例会(大阪外大、1954.1)で発表したものの概要。
24. 『遊仙窟』の成立に関する一考察—遊仙窟研究その一(単著), 『神戸外大論叢』第 5 卷第 2 号, 30-56 頁, 1954 年 7 月; 『論述集(上)』 150-187 頁。
- * 日本にのみ伝わる佚書『遊仙窟』は従来唐代の伝奇小説として扱われているが、むしろ変文に類すること、また無注、有注の二本があり、その注は党項系の夫蒙氏と陳氏の輪読によってなされていることを、元禄刊本の分段、注形式の分類を示しながら論じたもの。
25. 「孟子研究資料解題」(単著), 『講孟瑣説』第 1 号, 11-18 頁, 1956 年 4 月; 『追悼集』 55-62 頁。
- * 『講孟瑣説』は家塾で開いた孟子輪読会記録用パンフレット。
26. 「中唐詩人の白話に現れた語彙」(単著), 『中国語学』第 52 号, 3-8 頁, 1956 年 7 月; 『論述集(上)』 312-327 頁。
27. 「白話詩人王建とその時代—唐五代講唱文学発達史の一側面として」(単著), 『神戸外大論叢』第 7 卷第 1・2・3 号, 141-165 頁, 1956 年 6 月; 『論述集(上)』 246-283 頁。
28. 「遊仙窟文法稿案(上)—遊仙窟研究その二」(単著), 『神戸外大論叢』第 7 卷第 5 号, 65-97 頁, 1957 年 2 月; 『論述集(上)』 188-227 頁。
29. 「奴兒干永寧寺碑蒙古女真文積稿」(単著), 『石濱先生古稀記念東洋学論叢』 36-47 頁, 1958 年 11 月; 『論述集(下)』 172-187 頁。
30. 「中国諸民族の言語—その史的言語地理学的考察」(単著) 『神戸外大論叢』第 10 卷第 2 号, 41-79 頁, 1959 年 2 月; 『論述集(下)』 203-245 頁。
- * 隋代の中国諸民族の分布が、現代の少数民族の自治区、州、県とほぼ一致すること、歴史的言語資料としての碑文、華夷訳語について記す。
31. 「鮑照「擬行路難」訳釈」(単著), 『神戸外大論叢』第 10 卷第 3・4 号, 123-142 頁, 1960 年 3 月; 『論述集(上)』 355-374 頁。
32. 「日鮮共通基語音韻体系比定のための二三の仮説」(単著), 『言語研究』第 37 号, 73-78 頁, 1960 年 3 月; 『論述集(下)』 246-252 頁。
- * 日本言語学会第 41 回大会(神戸外大、1959.10)に発表した研究の梗概。
33. 「女真文字」(単著), 『アジア歴史事典』, 平凡社, 1960 年 5 月。
- * 『アジア歴史事典』4 卷の 443 頁の項目。
34. 「董西廂文法筆記(上)」(単著), 『神戸外大論叢』第 11 卷第 2 号, 113-131 頁, 1960 年 9 月; 『論述集(上)』 328-354 頁。
35. 「王建詩伝繫年筆記—王建と張籍と渭洛」(単著), 『神戸外大論叢』第 12 卷第 3 号, 35-72

- 頁, 1961年8月;『論述集(上)』284-311頁。
36. 「墨子とその時代」(単著),『墨子新索』第1号, 1-15頁, 1961年11月;『追悼集』65-81頁。
- * 『墨子新索』は家塾の墨子研究会の機関誌。
37. 「魏志倭人伝訳音の音価に就いて—上古中国語音韻体系との関連において」(単著),『神戸外大論叢』第13巻第3号, 55-68頁, 1962年9月;『邪馬台国の言語』124-146頁;『論述集(下)』253-267頁。
- * 『魏志倭人伝』の訳音の音価が後漢後半の洛陽の音韻体系によることを述べ、特に模韻の音価が /a/ 系であったとし、<奴><盧>を含む<卑奴母離><末盧>をヒナモリ、マツラと読みながら、同じく模韻の<卑弥呼>をヒミコまたはヒメコと読むのは誤りで、ヒムカと読むべきことを述べた。なお「卑弥呼訓読日向考」(『水門』第1号彙報欄、1963.7)あり。
38. 「読痛史雑記」(単著),『清末文学言語研究会報』第2号, 43-46頁, 1962年10月;『追悼集』91-94頁。
- * 呉趼人の『痛史』を資料として、話者の階層の違いによる人称の差異について述べる。
39. 「日鮮両語比較論に関する往復書簡」(単著),『水門一言葉と歴史』第1号, 17-28頁, 1963年7月;『論述集(下)』759-770頁。
- * 1952年4月3日付の Johannes Rahder 博士の手紙から始まる二年間にわたる本人との往復書簡。
40. 「東雅臆度抄(其一)一蛇と亀」(単著),『水門一言葉と歴史』第2号, 5-17頁, 1963年9月;『原始日本語研究』63-74頁;『論述集(下)』268-284頁。
41. 「南宋三大家詩集の和刻と江湖吟社の人々」(単著),『神戸外大論叢』第14巻第3号, 41-52頁, 1963年10月;『論述集(上)』376-391頁。
42. 「東雅臆度抄(其二)一鳥類譜I」(単著),『水門一言葉と歴史』第3号, 23-36頁, 1964年1月;『原始日本語研究』75-86頁;『論述集(下)』284-300頁。
43. 「東雅臆度抄(其三)一鳥類譜II」(単著),『水門一言葉と歴史』第4号, 28-40頁, 1964年6月;『原始日本語研究』86-93頁;『論述集(下)』300-311頁。
44. 「羅末麗初における中国語学史資料としての海東禪師塔碑銘について」(単著),『神戸外大論叢』第15巻第3号, 47-66頁, 1964年9月;『論述集(上)』470-496頁。
- * 西暦939年に建てられた「大鏡大師碑」等の碑文に記された<作摩生><為什勿><与摩>等の語は、単に朝鮮だけでなく中国資料としても価値が高いことを述べる。
45. 「高句麗百濟開国の伝説と百濟建国の史実(上)」(単著),『水門一言葉と歴史』第5号, 10-21頁, 1964年11月;『論述集(上)』430-449頁。
46. 「高句麗百濟開国の伝説と百濟建国の史実(下)」(単著),『水門一言葉と歴史』第6号, 9-20頁, 1965年2月;『論述集(上)』449-469頁。
47. 「日本風土記に於ける日本語のアクセント表記について」(単著),『久重福三郎・坂本

一郎先生還暦記念中国研究—経済・文学・語学—』117-133 頁, 1965 年 6 月;『論述集 (上)』392-412 頁。

*『日本風土記』の訳音の体系が明代の日本語を記録した寧波音系であることを記し、その日本語のアクセントを表記するに当っては、声調の差によって高低を示していることを述べる。

48. 「朝鮮語一音節名詞の史的比較言語学的考察」(単著),『朝鮮学報』第 39・40 合併号, 74-120 頁, 1966 年 4 月;『論述集 (下)』356-407 頁。

49. 「大阪東洋学会の『亜細亜研究』と『奉天図書館叢刊』について」(単著),『水門一言葉と歴史』第 8 号, 1966 年 5 月;『論述集 (上)』65-81 頁。

50. 「新羅文武王陵碑文初探」(単著),『神戸外大論叢』第 17 巻第 1・2・3 号, 179-190 頁, 1966 年 6 月;『論述集 (上)』497-516 頁。

51. 「全徳報子弟書紹介—韓小窗子弟書考証底稿」(単著),『神戸外大論叢』第 18 巻第 3 号, 23-36 頁, 1967 年 8 月;『論述集 (上)』413-429 頁。

52. 「満州シャーマニズムと賀茂の祭祀—玉依姫、玉依彦と崇神祭祀王朝」(単著),『外国学資料』第 20 号, 170-188 頁, 1968 年 3 月;『論述集 (上)』82-111 頁。

53. 「詩詞曲の接点『樂章集』—宋詞覚え書き・その一」(単著),『神戸外大論叢』第 19 巻第 3 号, 27-44 頁, 1968 年 9 月;『論述集 (上)』626-653 頁。

*宋初の詩人柳永から楽府と詞のつながりと戯曲への萌芽を考察しようとした。

54. 「元代白話碑」「百喻経」「遊仙窟」(単著),『中国語学新辞典』, 光生館, 1969 年 10 月;『追悼集』95-101 頁。

*本人担当部分:「元代白話碑」(259-261 頁)、「百喻経」(288-289 頁)、「遊仙窟」(293-294 頁)。

55. 「晁瑞礼と蘇門と琴趣外篇の詞人達—宋詞覚え書き・その二」(単著),『神戸外大論叢』第 21 巻第 3 号, 37-54 頁, 1970 年 8 月;『論述集 (上)』654-679 頁。

*柳永詞の継承書としての『琴趣外篇』という名の詞集を残した詞人達、特に晁瑞礼について、その文学史的位置付けを述べた。

56. 「女真文字と現存史料」(単著),『歴史教育』第 18 巻第 7 号, 25-31 頁, 1970 年 9 月;『論述集 (下)』408-418 頁。

57. 「大宝二年籍帳の仮名体系について (上) —美濃筑紫両古方言音韻体系の資料として」(単著),『神戸外大論叢』第 23 巻第 3 号, 1-11 頁, 1972 年 8 月;『邪馬台国の言語』147-161 頁;『論述集 (下)』419-429 頁。

58. 「大宝二年籍帳の仮名体系について (下)」(単著),『神戸外大論叢』第 24 巻第 3 号, 33-51 頁, 1973 年 8 月;『邪馬台国の言語』162-189 頁;『論述集 (下)』430-450 頁。

59. 「日本語北方起源説—アルタイ学の立場から」(単著),『言語』第 3 巻第 1 号, 2-10 頁, 1974 年 1 月;『論述集 (下)』451-462 頁。

60. 「邪馬台国の言語」(単著),『伝統と現代』第 26 号, 117-124 頁, 1974 年 3 月;『邪馬

台国の言語』81-96頁；『論述集（下）』463-487頁。

*後に佐伯有清編『邪馬台国基本論文集Ⅲ』（1982.7）に収録。

61. 「万葉・宣命・訓点語—日朝両語の情意を表す語について」（単著），『江上波夫教授古稀記念論文集』443-463頁，1977年4月；『邪馬台国の言語』190-216頁；『論述集（下）』577-596頁。
62. 「日朝色彩名義考釈—東雅臆度覚書」（単著），『水門—言葉と歴史』第10号，71-78頁；1977年4月；『論述集（下）』597-607頁。
63. 「邪馬台国をめぐる言語10の知識」（単著），『歴史読本』第22巻第10号，108-115頁，1977年8月；『邪馬台国の言語』77-81，97-111頁。
64. 「遊仙窟の注者達とその出自—ロナルド・イーガン氏の論文に関連して」（単著），『万葉』第96号，36-47頁，1977年12月；『論述集（上）』228-245頁。
65. 「日向に関連あるか女王卑弥呼」（単著），『科学朝日』第38巻第2号，56-60頁，1977年12月；『邪馬台国の言語』112-123頁；『論述集（下）』608-615頁。
66. 「蒙古韻略と中原音韻—四声通解の俗音と今俗音」（単著），『神戸外大論叢』第29巻第3号，27-43頁，1978年8月；『論述集（上）』112-135頁。
*朝鮮李朝の中宗期に崔世珍が著わした『四声通解』はハングルで漢字音を表記しているが、その音韻体系は明朝官撰の『洪武正韻』によっていること、また俗音、今俗音と注記されているのは、それぞれ『蒙古字韻』『中原音韻』であることについて論証を試みている。
67. 「須藤淳氏の質疑に答える手紙—日朝比較言語学の方法論をめぐる—」（単著），『水門—言葉と歴史』第11号，21-34頁，1978年8月；『論述集（下）』778-794頁。
68. 「『皇極経世書』声音図の音価と『韻略易通』の音韻体系について—『雞林類事』の朝鮮語を表わす漢字音の体系と関連して」（単著），『神戸外大論叢』第30巻第3号，27-45頁，1979年8月；『論述集（下）』616-633頁。
*『伊川擊壤集』の著者邵雍の『皇極経世書』「声音図」の表わす体系が、12世紀初頭に宋の孫穆によって編纂された高麗語＝中世朝鮮語を漢字借音によって表記した『雞林類事』の表わす音韻と合致すること、またこの体系に近い韻書として『韻略易通』があること、およびその音価についての比定をおこなっている。
69. 「借音仮名からみた稻荷山鉄劍銘—その作成年次におよぶ」（単著），『京都産業大学国際言語研究所所報』第1巻第3号，86-93頁，1980年6月；『論述集（上）』517-524頁。
*1979年10月15日、京都産業大学で開かれた「日本祖語とその系統に関するシンポジウム」で発表したものに加筆。115文字の稻荷山鉄劍銘が欽明期の百濟史料の音韻体系と同じく上古漢字音に依っていること、また<獲加多支鹵>はワカタキロと訓むが、これを雄略天皇と直結させる説には無理があることを述べている。
70. 「形容詞語幹とその派生形について—日本語系統論と関連して」（単著），『京都産業大学国際言語研究所所報』第1巻第3号，142-145頁，1980年6月；『論述集（上）』136-148

頁。

* 「日本祖語とその系統に関するシンポジウム」で発表したもののレジュメ。

71. 「日朝両国漢文訓読探源（上）」（単著），『朝鮮学報』第 97 号，13-24 頁，1980 年 10 月；『論述集（上）』544-557 頁。

* 1980 年 10 月 4 日、天理大学で開かれた第 31 回朝鮮学会大会の公開講演に加筆したものの。

72. 「北齊鄴都を支えた人々—胡漢複合文化説導論」（単著），『神戸外大論叢』第 31 卷第 3 号，41-56 頁，1980 年 11 月；『論述集（上）』792-814 頁。

* 『切韻』が規範とした音韻体系はその選定に関与した 8 人のうち、鮮卑族出自の陸法言を始め 5 人が鄴下の人であることから、従来言われているように洛陽の音ではなく、北齊の鄴都の音であること、1971 年河南省安陽県の大將軍范粹墓から発見された胡騰舞の描かれた扁壺と関連して北齊の宗室高氏の出自を中心に北齊の鄴都の文化が胡漢複合の上に成り立っていたことを述べた。

73. 「神戸外大呉語研究班を中心とする研究の経緯についての報告」（単著），『アジア・アフリカ語の計数研究』第 13 号，145-147 頁，1980 年；『追悼集』103-105 頁。

74. 「日朝両国漢文訓読探源（下）」（単著），『朝鮮学報』第 99・100 号，91-108 頁，1981 年 7 月；『論述集（上）』558-579 頁。

* 稲荷山鉄剣銘の発見と阿直岐王仁の漢文読法伝授説話から漢文訓読の様態を日朝相互に対比して、日本の漢文訓読法は朝鮮のそれに基づいて起り、日朝両国それぞれ異なった方向へ発展したものであることを論じた。

75. 「百濟鎮将劉仁願の出自について—匈奴系劉氏の系譜」（単著），『神戸外大論叢』第 32 卷第 3 号，55-71 頁，1981 年 10 月；『論述集（上）』815-838 頁。

76. 「倭人伝の地名考」（単著），『歴史公論』第 86 号，32-37 頁，1983 年 1 月；『論述集（上）』580-588 頁。

* 16 世紀に書かれた『日本風土記』の漢字による地名、山口・難波に対する<羊馬窟諸><男女懐>などの表記が当時の江南音によっていることを例として倭人伝地名の表記が 3 世紀の洛陽音によっていること、またその訓みかたについて述べた。

77. 「胡漢複合文化論序説—戦国漢の中山から北朝隋唐に及ぶ」（単著），『神戸外大市民講座講義集』1-18 頁，1983 年 10 月；『論述集（上）』839-865 頁。

* 第 13 回神戸外語大市民講座（神戸市勤労会館、1983.10.4）における講義に加筆したものの。

78. 「宋詞雅俗言助語辞雑験—宋詞文学言語における雅俗について」（単著），『神戸外大論叢』第 35 卷第 2 号，1-21 頁，1984 年 9 月；『論述集（上）』680-707 頁。

* 詞話、詞譜において詞は伝統的に雅詞、俗詞に分けて論ぜられるが、その雅俗には内容からばかりでなく、助語辞（虚字）の成立基盤と選択のされ方にも差があることに注目して、『全宋词』の助語辞を詞人別に雅俗に分けて、それぞれの詞人の文学史的位

置付けをしようと試みた。

79. 「唐昭陵を巡る人々の出自について—胡漢複合文化論之四」(単著),『神戸外大論叢』第36巻第1号,23-33頁,1985年8月;『論述集(上)』866-882頁。
80. 「上代日本語の源流を探る—記紀・万葉を手がかりとして」(単著),『別冊歴史読本・謎の歴史書『古事記』『日本書紀』』,76-82頁,1986年1月;『論述集(下)』688-701頁。
81. 「日朝比較言語学への誘い」(単著),『角川朝鮮語大辞典』18-20頁,1986年2月;『論述集(下)』702-705頁。
82. 「日朝比較言語学の方法」(単著),『語源研究』第9号,21-27頁,1986年4月。
83. 「漢代中亜の遊牧部族国家雑験(上)」(単著),『水門一言葉と歴史—』第15号,1-5頁,1986年11月;『論述集(上)』890-897頁。
84. 「稻荷山鉄剣銘の銘文をどう読むか」(単著),『邪馬台国』第33号,102-115頁,1987年10月;『論述集(上)』525-543頁。
85. 「日・韓両語比較研究上の問題点」(単著),東国大学校日本学研究所『日本学』第7輯,25-43頁,1988年4月;『論述集(下)』706-723頁。
86. 「風土記、朝鮮語起源地名考—百濟語スキ・新羅語ツキについて」(単著),『歴史と神戸』第28巻第2号,2-8頁,1989年4月;『論述集(上)』589-598頁。
87. 「記紀源流考—日朝比較言語学から提言する」(単著),『別冊歴史読本・『古事記』『日本書紀』総覧』,302-308頁,1989年6月;『論述集(上)』599-610頁。
88. 「日本神話の農耕起源説話について—東雅臆度抄・草木譜外篇」(単著),『日本学』第8・9輯号,163-172頁,1989年9月;『論述集(上)』611-623頁。
89. 「契丹漢字音探源」(単著),日中合同契丹文字国際シンポジウム(於羽田記念館),1991年5月15日;『論述集(下)』724-737頁。
90. 「匈奴の称号単于について—上古漢語音韻とその訳音表記」(単著),『水門一言葉と歴史』17号,31-39頁,1992年2月;『論述集(下)』746-758頁。
91. 「契丹文字、女真文字、および西夏文字の関連性についての考察」(単著),中国北方古代文化国際学術研討会(於中国赤峰市),1993年8月13日;「契丹文字、女真文字及西夏文字相互關係的一个窺測—從成吉思皇帝聖旨碑背面的番字談記」,赤峰市北方文化国際研究中心編『中国北方古代文化国際学術研討会論文集』,1995年9月;『論述集(下)』738-745頁。
92. 「西夏語訳類林導論」(単著),『水門一言葉と歴史』第18号,52-86頁,1996年10月;『論述集(上)』708-769頁。
93. 「西夏語と近代漢語の成立について—包括・排除の代名詞と方向を表わす助動詞」(単著),『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第18号,258-278頁,1997年3月;『論述集(上)』770-790頁。
94. 「玄理冲秀の詩人李頎と河嶽英靈集—盛唐詩に対する評論の中の李頎」(単著),『日本

- 中国学会創立五十年記念論文集』331-346頁，1998年10月；『追悼集』431-416頁。
95. 「日朝両語の比較研究における琉球方言の役割について」、『語源研究』第39号，34-39頁，2001年6月；『追悼集』114-119頁。
 96. 「海東禅宗を巡って一聖住寺朗慧和尚白月葆光塔碑銘を資料として」(単著)，『朝鮮学報』第199・200号，63-89頁，2006年7月；『追悼集』415-389頁。
 97. 「西夏語資料略解—涼州感通塔碑の発見と造塔縁起」(単著)，『東洋学術研究』第45巻第2号，180-205頁，2006年12月；『追悼集』388-363頁。

<その他>

1. 「殷墟出土の亀甲獣骨文字に就いて」(単著)，『中国文化』第7号，1948年7月。
2. 「G. J. Ramstedt 著作目録」(単著)，1951年4月。
3. 「中国語ラテン化運動とエスペランチスト」(単著)『国際語』第1号，20-23頁，1952年3月；『追悼集』20-22頁。
4. 「五体清文鑑について」(単著)『書報』第1号，6-7頁，1958年4月；『追悼集』63-64頁。
5. 「王建詩訳抄」(単著)，『光沢』第1号，1-5頁，1960年1月；『追悼集』82-86頁。
6. 「別離記—李季蘭故事」(単著)，『サブリエ』第50号，15-25頁，1961年10月；『追悼集』484-474頁。
7. 「別離記—李季蘭故事」(単著)，『サブリエ』第51号，22-35頁，1962年1月；『追悼集』473-460頁。
8. 「王建詩訳抄」(単著)，『自分の眼で』第1号，25-28頁，1964年1月；『追悼集』87-90頁。
9. 「自己否定論—自己否定から自己肯定へ」(単著)，『原点』第1号，25-29頁，1969年9月；『追悼集』458-454頁。
10. 「五・四運動—五・三十事件と破防法—安保闘争」(単著)，『原点』第2号，3-9頁，1969年11月；『追悼集』453-447頁。
11. 「非日常性への希求—外在的日常性と内在的日常性」(単著)『原点』第3号，1-3頁，1970年1月；『追悼集』446-444頁。
12. 「中国革命の原型と革命思想の原点—湯武革命論」(単著)，『原点』第4号，1-12頁，1970年4月；『追悼集』443-432頁。
13. 「中国少数民族と周辺民族の言語と文化」(単著)，第2回神戸外大市民講座講義要項，8-11頁，1972年10月。
14. 「中華字典を手にして思うこと」(単著)，『中国語』第12号，1頁，1972年12月；『追悼集』102頁。
15. 「日朝比較言語学設立への道—両語の人体名詞の二三について」(単著)，『朝日新聞(夕刊)』，1973年4月21日。

16. 「邪馬台文化圏の言語—問題解決の可能性を秘める」(単著),『毎日新聞(夕刊)』,1973年8月23日。
17. 「アイウエオの原形—倭人のことば」(単著),『読売新聞』,1976年6月2日。
18. 「日本語系統論争について—日本語の起源をさぐる」(単著),第9回神戸外大市民講座講義要項,11-12頁,1979年10月。
19. 「古代日朝語の可能性」(単著),『無限大』第48号,29-38頁,1980年4月;『追悼集』120-128頁。
*菅野裕臣氏との対談。
20. 「日本語のルーツは何語か」(単著),『高校通信東書』第58号,2-5頁,1980年6月;『追悼集』106-109頁。
21. 「研究所の建てられた頃」(単著),『神戸外大報』第61号,1頁,1982年7月。
22. 「太田辰夫先生を送ることば」(単著),『神戸外大論叢』第33巻第3号,1-4頁,1982年10月;『追悼集』261-263頁。
23. 「遊仙の岩屋と幽谷の虚実」(単著),『神戸外大報』第65号,1頁,1983年7月;『追悼集』110頁。
24. 「中国における胡漢複合文化」(単著),『神戸外大報』第69号,1-2頁,1984年7月;『追悼集』111-112頁。
25. 「女王「卑弥呼」は何と呼ばれたか?」(単著),『神戸外大報』第73号,1頁,1985年7月;『追悼集』113頁。
26. 「高橋先生の思い出」(単著),『高橋正武先生を偲ぶ』85-87頁,1985年12月;『追悼集』256-257頁。
27. 「回想の中の遭り逢い」(単著),『神戸外大論叢』第37巻第4号,15-21頁,1986年10月;『追悼集』269-273頁。
28. 「思い出すまま」(単著),長田夏樹の古稀を祝う会,1990年6月;『追悼集』250-255頁。
29. 「中国語との出会いと学習時代」(単著),『TONGXUE』第5号,1-3頁,1993年2月;『追悼集』258-259頁。
30. 「契丹文字の結んだ縁」(単著),『小林行雄先生追悼録』96-98頁,1994年2月;『追悼集』264-265頁。
31. 「久しかるべし—「水門の会」今昔」(単著),『神戸市外国語大学五十年史』285頁,1996年6月;『水門』第21号,269-270頁,2009年4月;『追悼集』266頁。
32. 「藤枝さんの思い出」(単著),『藤枝晃先生追悼文集』70-72頁,2000年6月;『追悼集』260頁。
33. 「思い出すこと」(単著),『水門—言葉と歴史』第21号,245-246頁,2009年4月;『追悼集』267-268頁。

<逝去後の発見に係るもの>

1. 「日本語再建私説」(単著), 『武蔵野』(東京府立第二中学校学友会) 第 50 号, 27-29 頁, 1939 年 3 月 ; 『KOTONOHA 百号記念論集』(古代文字資料館) 3-5 頁, 2011 年 3 月。